

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和6(2024)年
12月号
通巻652号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和6年12月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監製
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



瑞光院寢室の杉皮の天井 (文・7頁)

昭和49(1974)年12月23日 降誕祭法話より

相互扶助が本当の救い

法主 矢追日聖 (満63歳)

同じ誕生日の意味

今日は大倭のお祭りになっておるんですけれども、大倭のお正月で新春になるんです。昨日の22日が冬至で「冬至」と申しまして、昼が一番短い訳です。

昔と申しましても、千年、二千年よりもっと昔の話ですけれども、古代の人はこの冬至を計算してたんじゃなしに、実感として捉えたと思うんです。この日の昼が一番短かった。それで冬至の翌日から太陽が我々の方に向かって近づいてくる。いわゆる新しい春を迎えていくところから、ちょうど節の分かれ目になっておるんです。

冬至が過ぎると新しい春を迎えるというのが古代人の感覚だったと思います。私もそれに倣いまして、大倭は今日から新春でございます。そういうような意味で門松も昨日立ててくれまして、春を迎える準備もほとんど昨日のうちにしてくれております。

だんだんと日が伸びていくし暖かくなってくる。そういうような時に偶然か必然か、または神さんの計らいか私には分からないですけれども、明治の44年、1911年になりますけれど、私が生まれたらしいです。まあ戸籍ではそう載っております。親から聞けば12月23日らしい。大倭の元旦に誕生しているということになるんです。これは何かの定めがあったのか分かりませんが、今の皇太子殿下(※現上皇陛下)がちょうど12月23日に

御降誕になっている。天皇陛下が崩御になって次の天皇の時代になると、毎年12月23日は天皇誕生日として国民の祝日でお休みになると思います。ここ大倭のお祭りもそれと同じ日になるんで、何か妙な繋がり、因縁があるんじゃないかというようなことを思うんです。それと同時に世の中も何か変わっていくんじゃないかと、そういうような感じがします。

寿命は神さんの定め

今日は私の誕生日ではございますけれども、おかげ様で満の歳で申しますと、1911年生まれますから63年目です。

60歳を過ぎますとこれは人生の終末に近い。もう老境に入っておるんですね。これからの先を考えると、もう一步一歩墓場へ近づいただけであって、私個人の一身上においては、たいした変化がない。頭の毛がさらに白くなるとか、だんだんと肉体の機能が老化していく。そして結局半身不随になるかあるいは中風になるか、あるいはお迎えが来るのか、そういうようなことをひしひしと感じる年齢でございます。

こういうことを言うと、なんとなしに人生の終末というか、寂しいような感じがするかも知れませんが、私の場合は逆に非常に嬉しいんです。この宇宙にある全ては形としてこの世に出てきた以上、いつかはその形がなくなる。これはもう地球の上には我々が宿命的なものです。そりゃもう絶対的なものです。これだけは絶対という言葉を使えると思うんです。やがては自分も肉体が老化し、最後はまた土に還る。

生まれる前は私の姿というものは全然なかったと思います。母親の腹にもまだ入ってない時です

から、訳の分からん空ですね。何も形の無い気から始まって、親2人がどうかして子どもを宿したと思うんだけど、その時に私が作られた。神さんの計らいがあるんですけれども、根元は訳の分からん気から出発して形が出来てきて、十月腹ん中に入っておって生まれ、それから63年の現在まで来ている。

僅か60年余りの変化によって、今のようになんぞと痩せ衰えてくるし、頭の毛が白くなるというのは、神の定めということになっているんですからね。だから皆さん方は歳がいった時に、何か知らんけど怪しいような心境になるっていうのは、真実をつかんでいないからやと思うんですね。その意味でも私の余命は僅かと思っています。

私のお爺さんは60歳で死んでおるし、私のお婆さんも60歳で死んでおる。ところが私の両親は80歳を超えて案外長命でございます。隔世遺伝というものがあって、お爺さんお婆さんによく似るとも言われるんで、自分の祖父母が60歳とかで死んでおるし、俺の人生もここまでかなと思っただけでも、まだ生きさせてもらっておる。

今年で3年間命を延ばしてもらっているけれども、私自身は何歳まで生きるか分かりません。これは神さんの定めです。定めですけども、あと僅かな余生というもので、私は出来るだけこの肉体の使える範囲で、この世の中に何かしておきたいと思っておるんだけど、それは今の時点ではどうなっていくか分かりません。

今日までの63年間の過去を振り返って見た時、自分のものの考え方というものは非常に浅いものなんです。人間のこの頭で考え理解して、それを実行に移すとなった時には、思った通りにはなかなか結果は出てこないんです。出てこないけれども、それはまあ仕方がないと思ってそのまま続け

ていけば、振り返って見た時に自分が考えておったことよりもいい結果が出ている。そういうようながあるんじゃないかと思う。自分の考え方にとらわれて、思惑通りにやり遂げようと無理をする人は自滅すると思うんです。

自分の我をなくすること

我々人間たちが一番良いことやとか、こうすればいいんだということを考えておったとしても、その考え通りに行けば逆に不幸になっていく。ところが戦争に負けたという、私たちの考えておったことと逆の現象が出たために、戦後の日本人と日本が救われているんです。そういうような動きを神意と言う。神さんの心です。それは自分の家庭の中にもあるし、また人間一人一人の個人の場合にもあるんです。それを自覚しなければ、人生は争いが絶え間ない不幸になると思う。仏教では自我没却と言うんです。自分の我というものを出来るだけなくするようにした方がいい。

自分の考え方をどこまでも通していくという、そういう心を自我と表現をしてるんですね。自分の思惑をどこまでも押し付けていくというのは、結局不幸になるということなんです。

皆さんの家庭の中においてもよく見る現象です。年寄りにはみんな我が強いから、それで今の若い人と合わないとかよく言われます。年寄りというものは自分の思惑を通したい。長い間の人生経験を積んできてるんだし、今の若い子らは経験が浅いんやから、俺の方が先輩や、だから俺の言うこと聞けと年寄りの思惑を押し付けていく。そうなりますと若い者たちとの間に溝が出来てくる。そうすると家の中が面白くない。そういうようなものを我と言う。

結局日本が戦争に負けた時でも理屈は一緒やと思うんです。国自体としても軍自体としても意地やっただと思います。いったん火ぶたを切った以上引くわけにはいかないですよ。やり切ってしまった結局負けたけど、日本の国が救われたんです。そこに救いというものがあつたんですね。

虱しらみを取って喜んでいた時代

私の過去を振り返って見た時、私も明治に生まれているんですから、いろんなこと経験させてもらいました。後は死ぬだけのことですから、余生というものは出来るだけ喜びを持つような仕事をしたい。中風で寝てしまったら、もちろん家の若いもんの世話になるんですけども、健康でおる間は自分も喜び他人も喜んでくれるような



瑞光庵（瑞光院はまだ建てられていない頃）

世渡りの仕方をしたいです。これは私の願いです。皆さんもそうあって欲しいと思う。

昔も同じ人間ではありますけれども、変化しておるということは事実なんです。今はこうやって私が話せば皆さん方は真面目に聞いてくださいますけれども、終戦直後であれば虱取りをして喜んでった時代もあるんです。その虱を取って喜んでった時の私も、現在の私もこれ同じ人間なんです。ところがみずばらしいもの着てみずばらしい生活をし、食うもんもろくすっぽ食わないで栄養失調みたいな顔しとった時には、世間の人たちは真面目な人間として扱ってくれませんでした。

大倭における奴は何食うとんやろなという、そんな声を聞いたこともある。近所で物が一つなくなつたら、大倭の奴はもう飯食えへんから盗みよつてんやろとか、そんなことも言われてみたり。まあいろんな陰口とか終戦直後には随分ありました。けれども、その中を私は同じ人間として生きておるんです。

昭和の30年頃になってきて、福祉施設がここに出来てくるようになってくると、あの人変わった人やと思てたらまた変わったこと始めたなあと言われました。しかしこの福祉施設は悪く言う人はおりませんでした。そんなことをやっている福祉の関係の人がここに出入りしてくる。そしたら一体あの人は何やろ、さっぱり訳の分からん人やなど。そらね、私この山に入ってからでも、世間の噂とかいろんなことが耳に入ってきましたよ。

ものごとくはわれない心境

古い人は知っていますけれども、散髪に行く金がないから、頭の毛を放っておいたら勝手に伸びてよります。今やったらそんな長髪の若い人はどっ

ちに行ってもおりますが、その頃はいなかった。物もうけることは知らんから、使うことに節約しなきゃ生きていかれないんですよ。

物は大事にするとかして、出来るだけ金を使わんようにする。お金が入ってくるところがほとんどないんです。頭の毛が伸びとったかて命に別状はない。仕事なんかする時に頭の毛が長かったら邪魔になる。下から束ねて上でまとめて、括ついたら仕事が出来る。長くなってきたら前へ回せば、昔のちゃんまげ見たいな形になるわけです。

街頭布教なんか行く時、ちゃんまげでいたこともある。白い布で鉢巻していたら、なんやおかしな者が出てきよつたぞ、大本教かいなというようなことを言われました。大本教の人は長髪の人が多かつたからね。可笑おかなこと言われました。今やったら毎月大体1回ぐらい床屋へ行きますけど、散髪代が惜しいんで結わいとつたんですよ。

私の過去を村人も知っていますけれども、貧乏生活をしていたら、逆に家の親が同情してもらつとるんです。大学まで行かしてあんな乞食みたいなこととして、親御さん可哀想やとかね。親はどない思てはんねやろとか、私の親が同情してもらって、それで私は結局乞食扱い。世の中というのはそんなもんです。皆さん方はどうですか。例えば風体見てあの人はこんな人やと、皆さん方もやっぱりそんなこと思うでしょ。だけど一つの思惑で決めつけて物を見ていくというのは外さなきゃいけない。

私は今こんなふうになっているもんやから、まあ神さんか宗教家みたいやと思うやろうけれども、頭の毛バツサラ髪で風湧かして、禪ぜん一丁で出てきたらそりや可笑しいわな。けれどそういうようなものを全て超越した気持ちで相手に接するような、とらわれない心境にお互いになつて欲しい

と思う。

私は掘って立て小屋で虱を湧かして生活している時も非常に楽しかった。虱を知ったのは生まれて初めてでした。一晩に5匹腹巻きから取ったら、今日は大漁や言うて寝る前に声出して喜んでた。どこからか薬を持ってきて、それをまいたら虱がいなくなってしまうね。いなくなったら寂しいんですよ。物の楽しみというのはね、どんなところにもあると思うんです。

貧乏生活を心から楽しむ

小さい4坪の家を建てた時でもそうです。天井の垂木に杉皮を張った時も、天気になってきたらそれがスルメみたいに反り返る。4枚か5枚張りつけたらええんやけど、金がないから杉皮もたった2枚しか張られへん。垂木の上に2枚しか張ってないから、お天気になったらみんなスルメみたいになりよる。また夏に夕立がきよったら雨漏りもする。さあ鍋出せ、茶碗出せとあちこちで受ける。皆さん方はどうですか、そんなところに楽しみ持てますか。

それがあんまり続いたらしんどなって、雨が漏らんよう屋根の上に藁を乗せた。まあ1年はよかつたんです。雨漏りが全然しない。こんな小さいところで住まいしとつても楽しみはあんな。

雨がちつとも漏らんから喜んでたら、1年余り経って今度はカブトムシになる幼虫か、白い奴が藁の中によけ入ってんねん。ごっついよう肥えた奴がポツ、ポツと落ちて来る。それで屋根へ上がって見て藁捲いたら藁の下にもういっぱい入って真っ白になつとる。

藁に浸透してきた水は下へ流れて、抜けないで下の杉皮に染み込むんです。杉皮はしょっちゅう

じくじくと湿気とつた。その上に乗っている藁も年中湿気とんねん。藁があつて温度と湿気があつたらそりや虫湧くの一番いい条件です。こりゃいかんと思つて今度はまた藁みんな剥いてしようた。その時はちよつと金も出来とつたから、また杉皮ようけ買うて2重3重と重ねてから、まあ何とかなつたんです。最初は折箱の蓋やか蒲鉾板やかかを、天井の裏から差し込んでいた。そうすると雨止まるからね。とにかく天井裏いっぱいやった。そういうようなことでもほんまに喜べる。

今私が寝ているのは4畳半の部屋1つだけですけれど、その上だけは天井に何も張っていません。今ですと杉皮の裏ばかり眺めて寝とつたんで、寝るところだけは丸太の垂木で全部杉皮張つてあります。

今は杉皮がよう見えています。そういう前の喜んだ時の心境は大切に持っておきたい。それで私の部屋の中の寝るところだけ杉皮を張つてあるんです。そうすると気持ちが変わらんねん。そういうような昔喜んだ気持ちを大事にしたい。

皆さん方の中には今日までの付き合いの中で、私の気持ちを汲み取ってくれてる方もあるやろうと思うんです。やっぱり人間というものはいろんな物事に楽しみ持てるような心境であつて欲しいと思う。

喜びをもつて楽しく暮らす

お互い働かなきゃ食べていけない世の中やから、働くことも結構やけれども、私の言うように働く中に楽しみを持つて欲しい。そうすれば利益というものは求めなくてもついてくると思うんです。こんだけもうけようと勘定するよりも、こんだけ仕事しようと思うことです。仕事したならば

必ず利益というものはついてくる。いろんな意味においてとらわれを出来るだけ外すことです。

自分の心の中において真に喜びを持ち、それで自分の人間関係を楽しむ暮らしとところに救いがあるんです。だから自分も救われるし、相手の人も救われている。人を救っているという相互扶助的なもの、それが本当の救いだと思ふんです。ある特定の有力な人、権力者が自分の能力で人を救うというような救いはいけないんですよ。

相互扶助の形、これが本当の救いなんです。商売の道も一緒と思う。人間の道も、植物と動物の関係や太陽と月の関係とかも、相対的なものが一体として、幸せというものの、生産というものを全て生み出しているんです。そういうように宇宙は仕組まれておらんやから、皆さんと私も共に命のある間はみんな仲良くいきたい。そしてみんなが幸せになるようなものの考え方としての付き合いもしていきたい。お互いの人間の生命というものは分かりません。だからこの息が途切れるまで、喜んで死んでいけるような生活の在り方を、私は皆さんに望みます。そこに神さんがあり仏さんがあり、自然の大きな力の働きがある。まず自分が自然の恵みというものを受け入れるような心で自分で作つていかなきゃいけない。それは個人でやるんじやなく、人とお互いに交わつた中において、家族の中においてそれが出来ていくんじやないかと思ひます。

時間も大分長うなりましたけれども、私の心境の一端を述べさせてもらつたわけです。私はもう先は短いですから、皆さん方と共に幸せに余生を過ごすし、自分の出来ることはやっていきたい。相談相手になれることは相談にもなつていきますし、自分のこれからの人生が皆さん方の何かのお役に立てば満足です。

大倭会文化行事報告

慰霊の旅

芝 香須 弥

10月20日、21日の1泊2日の大倭会文化行事に総勢24名の方が参加されました。朝8時30分に岐阜県恵那峡山菜園の昼食場所を目指してバスは出発。バスの中では昼食後に予定している「義仲館」の資料が杉本順一さんより配られ、それに伴う説明がある。法主さんの父・隆藏の弟である政一さんは源義仲の転生であったとの事で、また政一さんの妻の久子さんは義仲の従者・妾であった巴御前の転生であったとの事など源義仲についての話をされ、食事の時は「皆さんも一緒にどうぞ」といって食べてくださいと言われました。

文化行事という歴史的なことを知りつつ、いつも慰霊の心を持って鎮魂することが主たる目的であると思うので、学生のころから歴史が大の苦手な私が単なる観光目的で参加して良いものだろうか？と少し後ろめたい気持ちがありつつ、参加させてもらうたびに、これも慰霊のひとつだと思いいかに楽しませていただいています。

昼食後、「義仲館」見学。その少し裏手に義仲さんや巴御前のお墓があり皆さんで手を合わせました。

その後バスは休憩をはきみつ、今回のお宿である「高山グリーンホテル」に到着。大きな温泉でまったりした後、楽しみの食事。「皆さんと一緒に頂いてください」といって頂きました。その後カラオケが始まり、それぞれ皆さんから自慢の歌を聴かせてもらい楽しめました。法主さん、かあさん、溝口ツヤ子さん、岸野春子さんはじめ帰幽された多くの方が一緒に楽しんでくださった

だろうと思います。

21日朝8時にホテルを出発、バスは白川郷合掌造りを目指し走行。予定通りに到着、天候も良く空気も綺麗で清々しい気持ちで散策。白山白川郷ホワイトロードを走行し、バスは一路永平寺へと向かう。今年は暖冬のためか、紅葉には少し早かったようです。

永平寺門前、「ほっつきよ荘」で昼食、買物、拝観。階段が多く、参加者皆さんの平均年齢70?歳にとっては大変だったと思いますが、頑張つて参拝されました。私が一番驚いたのは、庭に葉っぱ一枚落ちていない。それくらい掃除が行き届いているのか、それとも葉っぱが落ちないのかと不思議に思うほどでした。永平寺を後にバスは一路大倭に向けて走行。

大倭に生れて70年。なぜ大倭に生まれることになったのか？父が帰幽してから母のいる反保の家で過ごすことが多くなってきました。霊界のことは何も分からないですが、皆さんのおかげで今の自分があると思っています。

そして何より今回の旅行で尽力くださった溝口さん、参加された皆さん本当にありがとうございます。

◀義仲・巴御前像



▼白川郷合掌造り



旅で浮かんだこと

杉本 順一

令和6年10月20・21日義仲館、高山グリーンホテル、白山白川郷ホワイトロード、永平寺を巡る。まず義仲館へ。館内の分かりやすい時代案内の後は館外にある義仲公、巴御前……のお墓で挨拶。いきなり義仲さん「カタジケナイ(何度も何度も)……。ミナサンニ ヨシナニ」との声。

「ヨシナニ(身にしてみても、ありがたい。皆さんによろしくお伝えください)」と喜んで、何度も声にされていた。私たちが大勢でお訪ねしたこともお分かりのようでした。

夜は高山グリーンホテル。

恒例のカラオケ大会？細かくは誰か書いてね。翌朝、8時出発。まずはホワイトロードを越える。前日のバスからの風景はあまり秋らしい風景は目立たなかったが、さすが白川郷ホワイトロードを登っていくほどに秋が深まっていくのが奇麗で見事でした。

実は本紙『おおやまと』の表紙写真が決まっていないので、今回の参加者に「写真」のコンテストをお伝えした。どんな写真が出てくるか、楽しみにしています。(※11月号表紙参照)

永平寺に到着。その前に禅についてのパンフレットをお配りしておきました。にわか勉強です。学研の『禅の本』から自分勝手に「禅のエキス」みたいな文字を並べました。それがこれです。

禅の心

三味(ぞまい)、あれやこれや為(な)そうと考えず、仏の姿のままに、ただひたすらに坐(すわ)る。ふと、がらんどろになってしまった心に、ありの

ままの「自然」が飛びこんでくる。

「ただ、ひたすらに」が重要なのだという。

無一物 「仏に逢えば仏を殺せ、祖に逢えば祖を殺せ」

これまで身にまどってきたものすべてを捨ててしまえ、という。

何ものにもとらわれず、縛られず、執着せず、たった今、ここにいる自分こそが、真実。

自由 自我の執着がぬけきった地平に、かけがえない、本当の自由が広がる。

そのとき、自由自在、融通無礙にまわりが動き出す。

己が世界の主人公となって動き出す。

生死 しかし、景色には同一のものではなく、人間はさまざまな思いに振り回されている。

「驚くことはない。素直にいただけばいいのだ。生きるときは精一杯に生き、死ぬときは死ぬばよい」

あるがままに——禅はそう教える。

(学習研究社『禅の本』による)
三昧・無一物・自由・生死、この4つで思い出した法主のお言葉。

三昧Ⅱ「無我の境地って、どんなものですか？」と私。

法主「うるそうて、しゃあない(うるさくてしかたない)。今なら想像くらいは出来ますが、私には実感はありません。」

無一物Ⅱ法主「自分の身体(からだ)も、自分の物ではない」

自由Ⅱ法主「偶然はないぞ」

生死Ⅱ法主「死んだ後にも自分がある」

これが私の如是我聞です。こんな話は法主さんと暮らした時間の中で、その時々ポロリと話されたことが多かった気がします。

こんなことを思い出しながら道元さんのことを考えていたら「ワガミヒトリノコトシテ カンガエテイマシタ」と道元さん。

法主は常々「宗教は人間性の向上や」と言われました。禪は「動から静へ」であるが、禅は「静

私とおやまと——30年の時を超えて

いのちの流れ(当時)

大阪府豊中市 吉 本 和 男

毎年秋に行われている一泊二日の大倭文化行事に昨年を含め連続四回参加させてもらっているのが私が大倭にご縁を頂いてから四年余りとなります。

三十才後半までひたすら利害の真只中に葛藤しそれでも多少の野心(我欲)のおもむくまま小さな世界での事業拡大を模索していた頃、予告もな

いまま我が反面教師たる対象が急に目の前から姿を消した時、誰もが体験されている虚無感を味わったものです。しかしながらその世界に飛び込む

前は我が身は暫く泥にまみれようとやがては自分の描く理想郷が実現できる筈だと意気込みだけはあったように思います。それは青春時代に燃焼し

つくせなかった反動を金銭社会の場で勢いに任せ突き進んでいたように思います。

考えてみれば普通の環境で育ちエスカレーターに乗ったままそれこそその時代の風に乗る人生前半を走って来ただけのことだったかも知れませ

ん。でも生命の流れが連続としたものであれば誰でも内なるものに気付かされる時が幾度か巡

ってくるでしょう。人生半ばを過ぎた今(心では皆様と同じくずつと青春のつもり)少し振り返ると以上の要約に尽きるわけです。生命の場においてもともと誰にも用意されている私にとっての出

会いの場の一つが大倭紫陽花邑であるかも。

から静へ」と言える思う。目指すところは同じ。10月23日、月次祭での聖歌「くにもと」を歌い出した瞬間に「ヨシナカ タダイマサンジョウ(義仲ただいま参上)」と聞こえてきた。早いお出まじだった。

(当時と現在)〈第5回〉

この九年近くシンプルな瞑想プログラムを日常生活に潜り込ませ何とか内なる静寂の場に自身をさらす体験を重ねるうちに私にとって必要なものは無理なく眼前に現出しだして来たように思われる。今進行形の反面教師たる連れ合いといえども私にとってすべて肯定できる対象となりつつある。

肉体としての個人は一個でもその心はどの場にも通わせることが出来る、矢追法主様が言われる地下水の心、それが場としての大倭紫陽花邑なのだ

だと私は見ます。半世紀近く経たこの邑に色々な人々が入り交流し足跡を重ねられてきたことを見聞きさせて頂くにつけ形としての場は変化して

も紫陽花邑たる心が生き続け、連なる人々が各々の働きを結びあえることができれば法主様のお役

目が引きつながらるのであらうと思います。

大倭と時を同じく出会った自然農の場にしばしば

体を選んでいるため今は邑には余り足を運ばませんが、私なりの役目を今後とも果たさせていた

きたいと願っています。時々には奈母太加天腹を念唱しつつ大倭のそばの阪奈道路を走り、かよった三

年目の赤目の田んぼの学びは冷夏に見舞われ不稔穂が沢山出来ましたが心を通わした分だけ前年よ

り姿かたちはたくましく育ち倍増のワラと次の命を結ぶに十分な種モミを残してくれました。この

新年に大倭の新たな歩みとともに生命のお運びに参加出来ることに感謝合掌です。

(現在Ⅱ平成23年に帰幽されました)

龍神と人間の霊的なつながり

法主を囲む座談の録音テープから

杉本 順一

ある日、昭和59年10月21・22日の大倭会主催の秋の一泊文化行事の思い出話に花が咲いていた。この文化行事は観光バスで、諏訪大社（上社・下社）を訪ねる旅行であった。

この旅行に参加されていた平谷照子さんに対して案内役のバスガイドさんが話された言葉からこの話は始まった。

ガイドさんが「今日くらい周りの景色がいつになく綺麗に見えるのは、めったにない」と不思議がられたということで、平谷さんは「自然を動かすような何かがあるのだろうかと思ったりしたんです」と法主に問うた。

法主 諏訪なんかに行った時でも、どこに行っても山岳地帯やろ。そんな山々には大きなもの、小さいもの、ぐるり龍神さんばかりやがな。私は人間としてバスに乗って行くんやけれどね。バスには、おおおやまととおおおやまと（大親元）の人間が集まるとるわけやろ。その上で大倭の龍神さんがもうとる（舞ってる）。そしたら周りも自然に綺麗になっていきよるんや。

某女 大倭にもいろんな龍神さんがいてはるんですか？

法主 いろんな龍神もいてはるけど一番上に金色の龍神さんが見えることもあるよ。

某女 金色の龍神さんが一番偉いとして、他に白とか黒とかいろいろあるんですか？

法主 龍神さんにもいろいろ色があるんやけどな。

金色の龍神がお出ましになったのは、鎌倉時代の元寇（1274年、1281年）の時だけ。そ

れまでは鎮まってはったんやけどね。人間界に金の龍神が出てきはったのは、これが初めてぐらいと違うか。その龍神さんの霊気を受けて我々は旅に行ったから諏訪のようなこともあったわけ。

それは拝殿の座布団でも霊気を受けたら金色の光が見えたと言う人もいたようなこともあるし、バスで旅行して龍神さんの霊気を受けると同じようなことやわな。

某女 山だったら龍神さんがいてはることもわかるけど……。龍神さんが人間に生まれることもあるんですか？

法主 そら今の人類は龍神さんの流れやから……。地球に人類が発生する以前からおったのが龍神さんやからな。そやから龍神さんは人類の大先祖になるわけや。男の精液の中を顕微鏡で見ても男（精子）の形の出発点は龍神の姿から始まるとるわけや。それが女のたまご（卵・玉子）に入ってるこんな（人間の）形に変わったけどね。そやから男のタネは龍神さんの姿から女の中に入ってるとして出てる。

日元 まあボウフラ（蚊の幼虫）みたいなものでつか？

法主 そやそや。それがいつてみれば人類の原始形やわな。

某女 勾玉みたいな形した？

法主 人間の肉体一つ見た時に、そこには瞬間的に何億年前から今日までの流れを形で端的に表している、霊界人は言うよ。

出発から死ぬまでが一つやわな。まあ地球そのものもいつか消える日があるんやわな。

霊界を見てたら龍神さんが上におって人格霊は下におる。なんぼ天皇がえらい言うても、龍神さんの方が上にいる。龍神さんは人間の先祖さんやの。

地球の変化によって龍神のような「ナガモン（長もん）」がなくなると人類が発生してきたわけやわな。人間より古い動物もいるやろけど、今は人間が地球を制覇支配してるけど。

それまでは地球を掌ったのは龍神やもの。そやから龍神の霊統を受けたものもようけいる。

※

「男（精子）の形の出発点は龍神の姿から始……」を想像するために、『日本大百科全書』（小学館）の「ヒトの精子（参照図）」を参考に、若いころは漫画家になりたかったという、大倭印刷社員の三嶋祥五さんにお願ひして左の図を描いていただきました。

同全書ではヒトの精子を、頭部・頸部・体部・尾部に分けて分類してある。参照図に並べて描いてあるヒトとウニの精子があまりにも似ているので驚きました。



表紙写真によせて

表紙のカラー写真はご覧のとおりですが、今の瑞光院ができる前の15年間は本紙3ページの白黒写真で出ている瑞光庵が法主さんのお家でした。法主さんと鈴月かあさんが瑞光院に還られてからは空き家でした。昭和39年6月柴地則之、杉浩史、杉本順一が入門して瑞光庵がその居城となり、法主さんの話にあるノミ・シラミたちとも同居し、夏の夕立も歓迎してくれました。（杉本）

あじさい日誌

11月9日 大倭会主催文化講演会講師の栗原俊雄さんとスタッフで食事会を開きました。
 11月10日 午後2時から大倭拝殿において大倭会主催文化講演会が開かれました。(報告は2月号掲載の予定)
 11月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。
 11月16日 午後、交流の家でFIWCの定例委員会が行われました。
 11月17日 午前9時から大倭大本宮拝殿の下で、金剛大龍王

さんの寢床と言われる藁敷神事が行われました。
 11月19日 大倭大本宮拝殿のエレベーターが全面的に改修されました。
 11月23日 午後2時から大倭大本宮の月次祭が開かれました。この日は昭和39年11月23日の法話をお聞きしました。
 午後4時から大倭会館で大倭会役員会が開かれました。三重県四日市市の中村勝彦さんが幹事に選任されました。
 11月25日 午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。
 11月30日 午後3時頃静岡の松

本直之さんに案内されて掛川市の大城由香理、西宮市の池山哲治さん、同じく原田和佐子さんが来邑されました。
 12月4日 午後2時から大倭神宮で金鶏祭が行われました。この日高砂市の山田芳史さんに連れられて、初めて芦屋市の雲川政高さん、大和郡山市の酒井和喜さん、神戸市の滝川仁さん、伊丹市の増永美和さん、泉北郡(大阪府)の布村由衣さんが参拝され、祭典後、紫陽花邑に来られました。
 12月6日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。午後6時半から大倭会館で邑後の

会があり、12月・1月の行事予定が話し合われました。
 大倭安宿苑では
 11月22日 第3回新入職員研修会が10時30分から会議室で実施されました。
 (菅原園)
 11月14日 午後から1階交流ホールで「おひさまデザート」を開催し、買い物を楽しみました。
 11月20日 映画『ドラゴンボール超 ブロリー』を上映しました。
 (須加宮寮)
 11月26日 お楽しみ外出で大阪の海遊館に向きました。ジンベイザメが優雅に泳いでいるのを見て喜んでいました。
 11月28日 奈良県心身障害者作品展の見学に行き、自分の作品の前で写真撮影をしました。
 (長曾根寮)
 11月22日 (特養) 玄関前にて紅葉を見て、季節を感じていただきました。
 11月25・28日 (デイ) 作品づくりで紙のクリスマスツリーを作りました。
 (茂毛路園)
 11月29日 午後より定例懇談会を開催しました。参加された方が「カラオケが好き」ということで、歌を唄ってもらい皆で楽しみました。
 (八重垣園)
 11月30日 午後からラジオ体操を行いました。皆さん体を積極

新年のご挨拶を申し上げます

宗教に帰依したからとて、その宗教が人に幸福を与えるものではない。帰依さえすれば必ず神や仏の加護があつて幸福になれると考える人は強欲の輩に限られている。幸福な生涯を送るためには、神ながらの法を悟つて、神ながらの大道を歩むことである。こうした意味に於いての宗教こそ、現実社会に存在する価値がある。特定の宗教を盲信することは、かえって自己を不幸におとしめるものである。

昭和四十年二月十二日

野草社『やわらぎの黙示』百五十八・百五十九頁より

大倭八十一年 元旦

宗教 大倭 教 長 矢 追 家 麻 呂
 紫陽花邑 邑人一同

あんない

的に動かしていました。
 12月2日 本園の創立記念日(12月1日)で1日遅れで昼食時に29周年をお祝いしました。

*年始祭(大倭神宮)
 1月1日(祝・水) 午後2時から大倭神宮にて。

*月次祭(大倭神宮)
 1月6日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

*大とんど

1月12日(日) 午前9時半〜10時半(厳守)、大本宮西の齋庭にて注連縄や門松等を火にあげる神事です。なお、天候による変更もあり得ます。
 針金・プラスチック等、不燃物は必ずはずしてきて下さい。

*大倭会主催祝会

1月12日(日) 午後2時より大倭拝殿にて。

※自分が気づかぬうちに、己の心の曇りが厚くなつていないだろうか!—そんな自分に気づかせてくれるいいチャンスになるかもしれない。気楽に集まって、楽しく、きびしく話し合いませんか。(大倭会)
 *月次祭(大倭神宮)
 1月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)
 1月23日(木) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

大倭大本宮拝殿にて。